

新刊紹介

梅原 猛

橋本峰雄編「哲学のすすめ」
藤沢令夫

朝倉 哲夫

国学者の本居宣長は、玉勝間という書物の中で次のような趣旨のことを述べている。

当世の日本人は、学者も一般の人々も、中国やインドのことを知らないのは恥と考えているようであるが、かんじんな日本のこと、自国のことは何も知らない。いや知らないばかりか、知らなくてもさしつかえないかのごとき偏見をもっている。こうした宣長の当時に対する時代批判は、そのまま現代の私たち日本人にも妥当するように思われる。たとえば、哲学者と称する人たち、彼らは日本には哲学や思想がないとでも考えている

のか、西洋のプラトンやカントを知らないのは哲学者として恥であると考えているらしいが、わが国の空海や道元や伊藤仁斉などを知らないのは一向に恥であると考えていないようなふしがある。そして外国の哲学思想に関して二番煎じ、三番煎じの研究に甘んじているのが実情なのである。私たち日本人は、もっと東洋や日本の思想を知る必要がある。

さて、私がここで紹介しようとする「哲学のすすめ」は、こうした点では従来の類書とは趣を異にするものと思われる。そこには、東洋や日本の智慧をもういちど発見しようとする強い願望と、現代の哲学不振の時代において哲学を再び復興しようとする意欲がひめられていると感ぜられる。本書は全体の構成が四部から成っている。ちなみに、それらの項目を示せば次のごとくである。

I 哲学を考える

哲学の三つの伝統について

II 哲学の問うもの

(1) 生と死の哲学

(2) 存在と価値

(3) 認識と論理

(4) 言葉

III 哲学の歩み

(1) 自然と人間—古代の哲学

(2) 信仰と理性—中世の哲学

(3) 自我と自然—近世哲学のあゆみ

(4) 体系の否定とさまざまな課題

—現代の哲学

(5) 東洋の智慧

IV 文献解題

さて、第一部、「哲学を考える」においては、「哲学の三つの伝統について」という主題の下に、「哲学の三つの源泉とその特質」とが語られている。哲学が、神話が目指したところの世界と人生との意味づけを、改めて理性的反省によっておこなったものであるとすれば、こうした意味での哲学の形成は、歴史の上では、三つの場所、ほぼ同じ時期に、すなわち紀元前六、七世紀頃に成立したとして、ギリシャ古代の哲学の諸学派、

仏教やジャイナ教を含むインド古代の諸学派、また孔子に始まる中国の春秋戦国時代の諸学派を哲学の三つの源泉として同等に取扱おうとしているのである。このような態度は、当然のことながら、従来の類書が哲学といえば西洋哲学にのみ偏っていた態度（西洋中心主義）を一歩越えているといえよう。そして序論におけるこうした態度は全体を通して貫かれているのであった。

第二部、「哲学の問うもの」においては、哲学の独自の問題として、「生と死」、「存在と価値」、「言葉」、「論理と認識」の四つの主題が論じられている。「存在と価値」、「言葉」、「論理と認識」などの三つの問題については、従来も哲学固有の問題として多く論じられていたが、「生と死」の問題は哲学問題として余り論じられていなかったと思われる。というのも、それは近代人が二重の方向において、一つは理性への信頼（理性は不死であり永遠である）において、もう一つは物質への信頼（物質は私た

ちの死後も、なお存在する）において死を超越したと考えたからに他ならない。

しかし、この第二部においては「生と死」の問題が改めて哲学問題として問われているのである。すなわち、近代のヨーロッパ文明は「不死の思想」を醸成させてきたが、このような文明は果して健全であろうかと問い、その根源が二つの不死のドラマ、ソクラテスとイエス・キリストと不死のドラマにあったとしている分析は鋭い。そして、「生と死」のこの問題をもういちど見直していく中に、東洋のこれらに關しての智慧が、今後の私たちの生き方にとって大いに役立つであろうことを示唆していたのであった。

第三部「哲学の歩み」においては、単なる哲学史の敘述ではなく、それぞれの各時代、各地域の哲学において、何がいったい問題であり、どういう点にそれぞれ、哲学の意味があったかが論じられている。従って、問題意識をもって哲学史の大きな流れを改めて見直してみるのには非常に興味があろう。特に、この第三

部では、東洋の智慧ということでは、儒教の思想の流れが論述されており、なかでも日本仏教の項目の中において空海の密教の世界、十住心の世界が述べられていることなど（その他にもいろいろある）は、従来の哲学史においてはみられなかったことであらう。わが国の空海や道元などは、世界思想史の流れにおいて独特な地位を占めているものと思われるが、この二人の思想などが取上げられているのは大いに喜ばしい。なお、第四部の文献解題は要を得ていて、概略を知るのは便利である。

ともかく、現代の哲学思想は、単にヨーロッパ的伝統のみに依存することはできないであらう。今や非ヨーロッパの、東洋の、あるいは日本の思想の伝統が想起されなくてはならない時代である。こうした時代において、本書が果す先駆的役割は貴重であらうと考える。

昭和四十四年二月 四五〇円

筑摩書房刊